

小学校入学前の生活に関する 振り返り調査

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は共同で、2015年から毎年、小学1年生～高校3年生の親子を対象にした「子どもの生活と学びに関する親子調査」を行っています。今回ご紹介するのは、2016年調査の回答者のうち、小学1年生の保護者を対象に行った「小学校入学前の生活に関する振り返り調査」です。調査結果からは、幼児期における保育者や保護者のかかわりが、小学校入学後の子どもの姿につながるということが明らかになりました。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください
(例：ベネッセ教育総合研究所「小学校入学前の生活に関する振り返り調査」(2017))。

保育者のかかわりと保護者の意識・行動との関係



初等中等教育研究室 主任研究員 邵 勤風

しょう きんふう 初等中等教育領域を中心に、子ども、保護者、教員を対象とした意識や実態の調査研究に多数携わる。これまで担当した主な調査は、「学習基本調査・国際6都市調査」(2006～2007年)、「第3回子育て生活基本調査」(2007～2008年)、「小中学生の学びに関する実態調査」(2014年)など。近年、学校段階間連携といったテーマに関心をもち、子どもの発達を踏まえ、学びの連続性を保障するために、周囲(親や教員など)の適切な支援のあり方を考えている。

調査結果の ポイント

- ◎小学校入学前の子どもの保護者は、生活習慣や文字・数・言葉といった「認知能力」につながるかかわりを多く行っているが、入学してからの1年間を振り返ると、主体性、粘り強さといった「非認知能力」や思考力につながるかかわりを入学前にしておくべきだったと考える割合が高くなる。
- ◎子どもや保護者に対する保育者のかかわりを、保護者は評価している。保育者による子どもへの直接的なかかわりだけでなく、保護者に対する子育て支援も、子どもの成長に間接的によい影響を与えている。
- ◎保護者は楽しさ、役立ち度、子どもの成長への実感のすべてで、園での生活に高い満足感を得ている。

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で行う「子どもの生活と学びに関する親子調査」では、小学1年生から高校3年生までの同一の子どもと保護者に毎年調査を行うことで、子どもがよりよい成長を遂げるにはどの時期にどのような支援があるとよいかを解き

明かそうとしています。今回は2016年の同調査の回答者から小学1年生の保護者に対して「小学校入学前の生活に関する振り返り調査」を実施して、保護者や保育者の入学前のかかわりが子どもに与える影響を調べました。次ページから、具体的なデータをご紹介します。

■「小学校入学前の生活に関する振り返り調査」の調査概要

調査対象:全国の小学1年生の保護者1,853人
そのうち回答者が母親で、かつ「子どもの生活と学びに関する親子調査2016」にも回答した1,491人を分析対象としている

調査時期:2017年2月

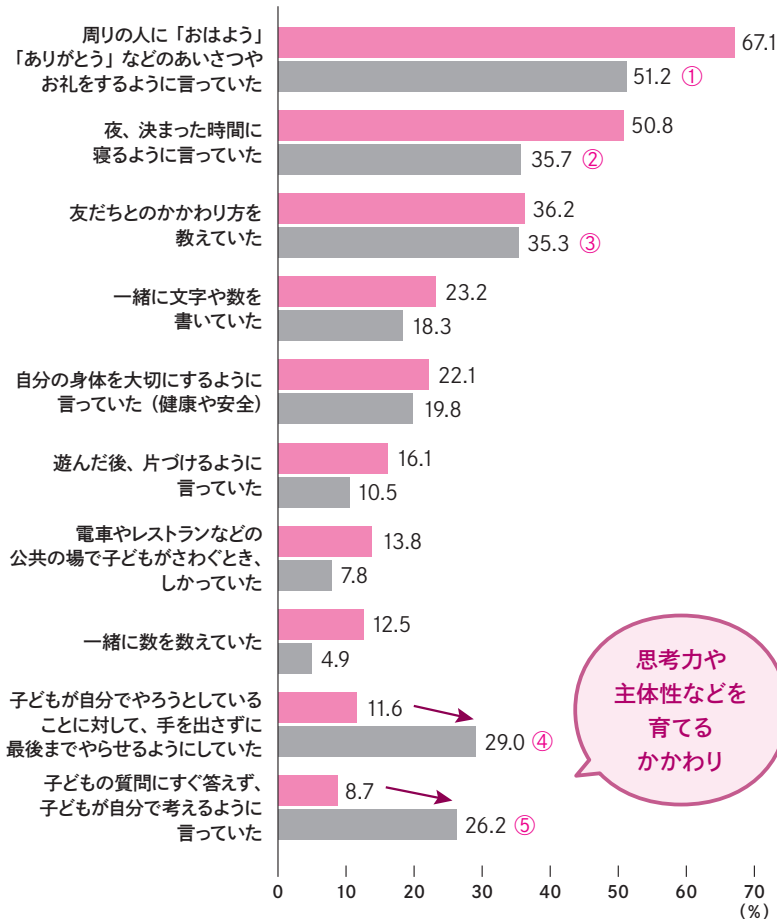
調査方法:郵送法による自記式質問紙調査

調査項目:入学前の子どもの生活、経験/保護者のかかわり/園での様子/など

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。ぜひご利用ください。▶ <http://berd.benesse.jp/>

入学後の1年間を振り返って気づく 主体性や思考力を育てるかかわりの重要性

■ 小学校入学を意識して行っていたこと ■ 小学校での1年間を振り返ってみて、入学前に行っておくべきだと思うこと



思考力や
主体性などを
育てる
かかわり

表 保護者の小学校入学前の子どもへのかかわり

生活習慣	夜、決まった時間に寝るように言っていた
	遊んだ後、片づけるように言っていた
	子どもに家のお手伝いをするように言っていた
人との関係性・マナーなど	周りの人に「おはよう」「ありがとう」などのあいさつやお礼をするように言っていた
	友だちとのかかわり方を教えていた
	いやなことがあっても、がまんするように言っていた
文字・数・言葉	電車やレストランなどの公共の場で子どもがさわぐとき、しかっていた
	自分の身体を大切にするように言っていた (健康や安全)
	一緒に数を数えていた
遊び	一緒に言葉遊びをしていた (しりとり、だじゃれなど)
	一緒に文字や数を書いていた
	子どもに外遊びをさせないようにしていた
主体性・粘り強さ・思考力	一緒にブロックや積み木などをしていた
	一緒に絵を描いたり、粘土や折り紙で遊んだりしていた
	1つの遊びには多様な遊び方があることを気づかせようとしていた
	子どもと一緒に出かけた後、お互いが感じたことなどを話していた
粘り強さ・思考力	子どもの質問にすぐ答えず、子どもが自分で考えるように言っていた
	子どもが自分でやろうとしていることに対して、手を出さずに最後までやらせるようにしていた

※1 「よくしていた」+「ときどきしていた」の%。

※2 保護者の、小学校入学前の子どもへのかかわりに関する18項目のうち、①入学を意識して行っていたこと、また②小学校での1年間を振り返ってみて、入学前に行っておくべきだと思うことを、それぞれ3つまで選択。①か②について、選択率が10%以上の項目をピックアップして図示した。

※3 ①～⑤は、上記②について数値の高い順に5位までを示した。

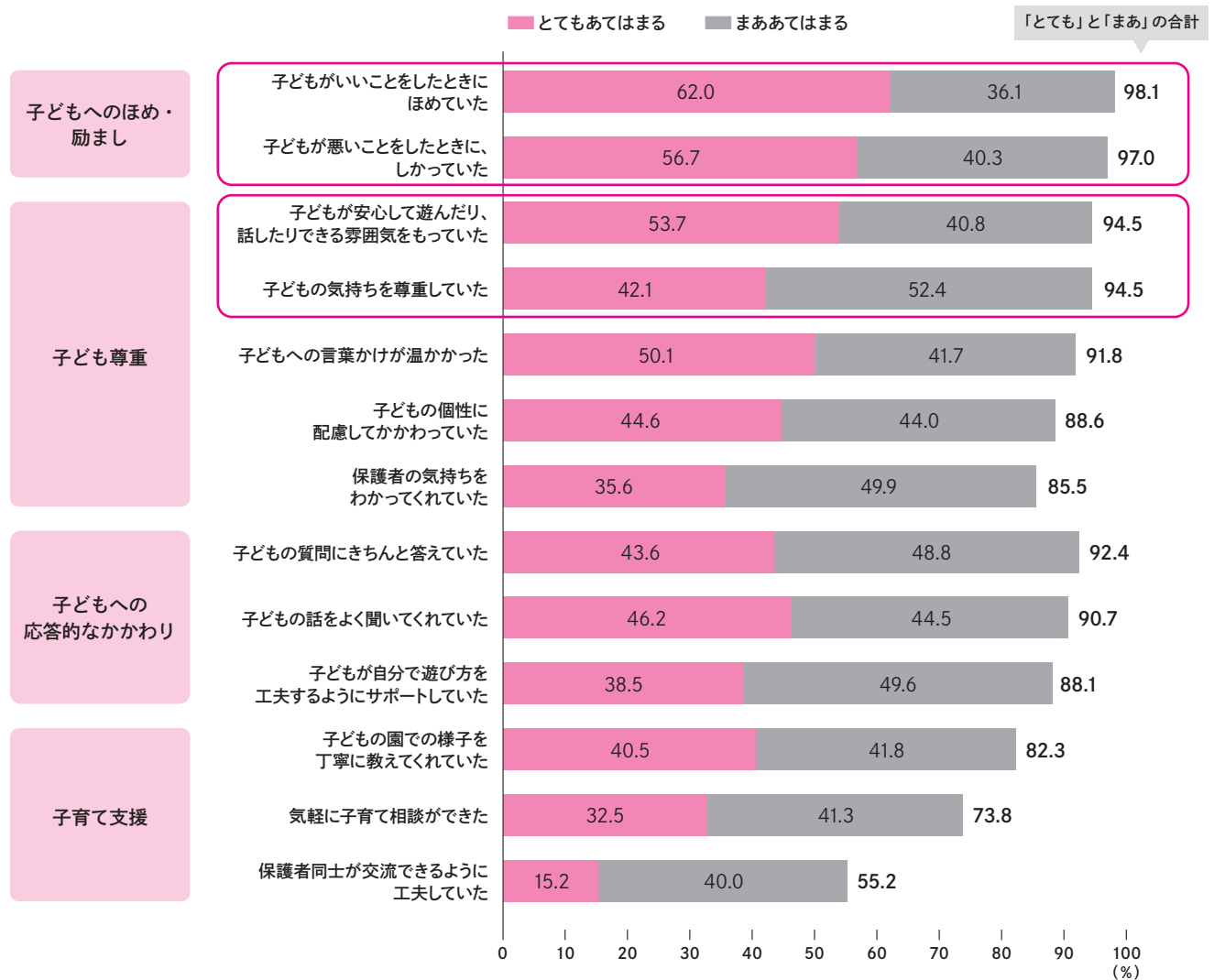
上のグラフは、保護者の小学校入学前の子どもへのかかわりに関する全18項目(表)の中から、「小学校入学を意識して行っていたこと」と、小学校での1年間を振り返り、「入学前に行っておくべきだと思うこと」を、それぞれ3つずつ選んでもらい、選択された割合が高い項目を示したものです。

行っていたこととしては、「周りの人に『おはよう』『ありがとう』などのあいさつやお礼をするように言っていた」「夜、決まった時間に寝るように言っていた」などの「生活習慣」や、「友だちとのかかわり方を教えていた」という「人との関係性・マナーなど」、「一緒に文字や数を書いていた」などの「文字・数・言葉」に関するかかわりが上位を占めます。

1年間を振り返り、入学前に行っておくべきだと思うことも、上位3つまでは実際に行っていたことと同じになりました。ただ、その後には「子どもが自分でやろうとしていることに対して、手を出さずに最後までやらせるようにしていた」「子どもの質問にすぐ答えず、子どもが自分で考えるように言っていた」という、主体性、粘り強さといった非認知能力や思考力につながるかかわりが続きます。

保護者は入学後の1年間を経験することで、主体性や粘り強さといった非認知能力や思考力につながる力を幼児期に育てることの重要性に気づいたと考えられます。

保護者は、子どもや保護者に対する 保育者のさまざまな働きかけを高く評価



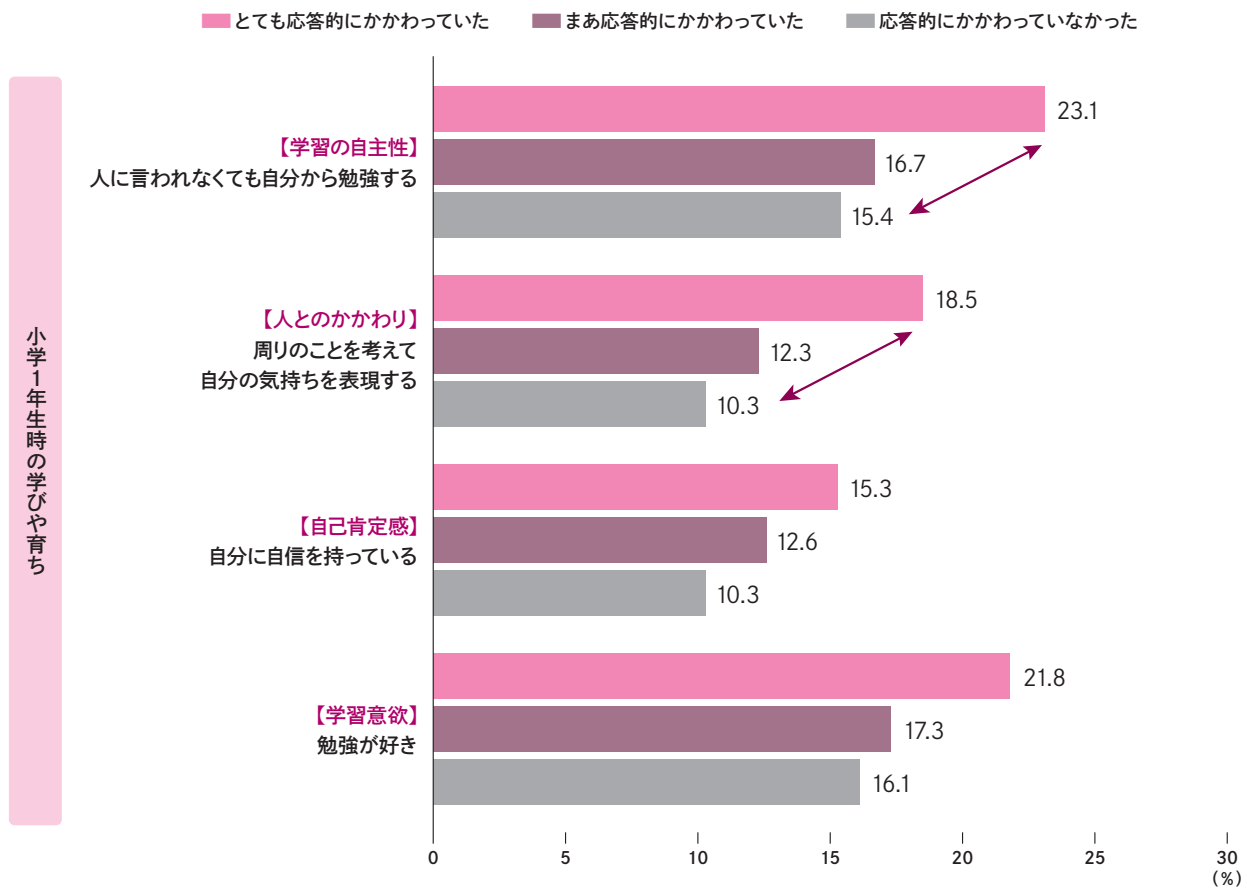
2は園での保育者のかかわりについて、保護者がどのように感じたかを示したグラフです。子どもや保護者に対する保育者のかかわりには、「子どもへのほめ・励まし」「子ども尊重」「子どもへの応答的なかかわり」「子育て支援」という4つの要素があります。

保護者が特に「あてはまる」と感じているのは「子どもがよいことをしたときにほめていた」「子どもが悪いことをしたときに、しかった」という「子どもへのほめ・励まし」に関するかかわりや、「子どもが安心して遊んだ

り、話したりできる雰囲気をもっていた」「子どもの気持ちを尊重していた」など「子ども尊重」に関するかかわりで、「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合計すると95%前後になります。他のかかわりも80%を超えるものが多く、いちばん低い「保護者同士が交流できるように工夫していた」でも約55%です。

保護者は子どもや保護者に対してさまざまな働きかけをしており、保護者はそれらを高く評価していると言えます。

子どもへの応答的なかかわりは 小学校入学後の主体的な学習姿勢に好影響



※1 保育者の「子どもへの応答的なかかわり」のうち、「子どもの質問にきちんと答えていた」「子どもの話をよく聞いてくれていた」の2項目を使用。2項目の得点を算出し、「子どもへの応答的なかかわり」を「高群」、「中群」、「低群」に3分割した。「高群」を「とても応答的にかかわっていた」、「中群」を「まあ応答的にかかわっていた」、「低群」を「応答的にかかわっていなかった」とした。

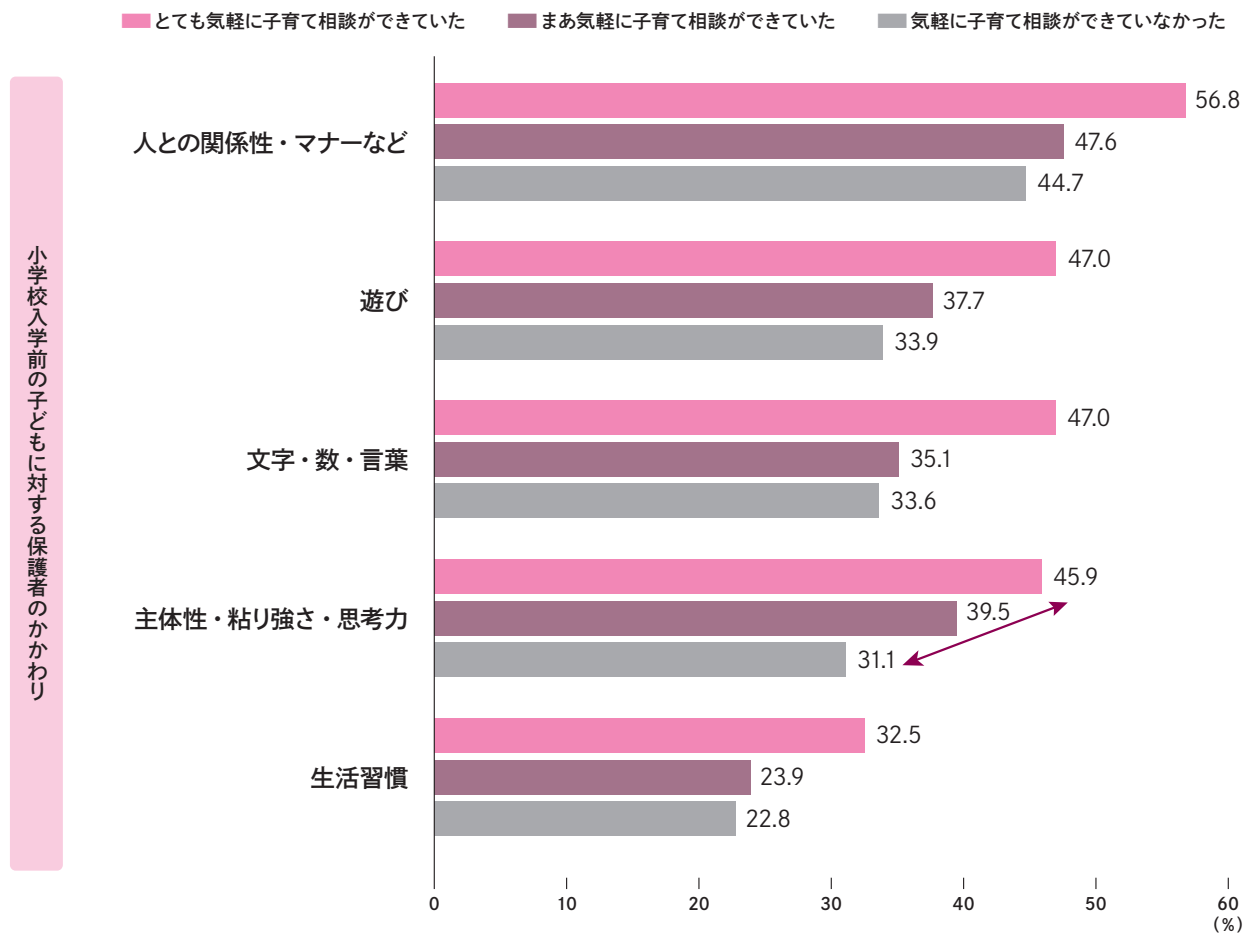
※2 「人に言われなくても自分から勉強する」「周りのことを考えて自分の気持ちを表現する」「自分に自信を持っている」「勉強が好き」は、この「小学校入学前の生活に関する振り返り調査」に回答した保護者が、子どもが小学1年生の時に回答した「子どもの生活と学びに関する親子調査 2016」の中の項目である。横棒の数値は保護者から見て子どもが「とてもあてはまる」の%を表している。また「勉強が好き」については、保護者から見て子どもの勉強が「とても好き」の%を表している。

3は、2(P18参照)のグラフに関連して、保育者のかかわりが、子どもの小学1年生時にどのような影響を与えているかを示したグラフです。子どもが小学1年生時の「人に言われなくても自分から勉強する」(学習の自主性)、「周りのことを考えて自分の気持ちを表現する」(人とのかかわり)、「自分に自信を持っている」(自己肯定感)、「勉強が好き」(学習意欲)という4つの項目について、幼児期における保育者の応答的なかかわりとの関連を見ました。

4つの項目すべてで、保育者が応答的にかかわっているほど、あてはまる割合が高くなっています。また、「とても応答的にかかわっていた」と「応答的にかかわっていなかった」の差に着目すると、「学習の自主性」や「人とのかかわり」は両者の差が約8ポイントあり、保育者の応答的なかかわりの影響がより大きいことがわかります。

園で保育者が子どもの質問にきちんと答え、話をよく聞くなどの応答的なかかわりをしていると、就学後の子どもの学びや育ちにより影響をもたらすと言えます。

子育て支援は 保護者の子どもへのかかわりに与える影響が大きい



- ※1 保育者の「子育て支援」のうち、「気軽に子育て相談できた」を使用。「とてもあてはまる」を「とても気軽に子育て相談ができていた」、「まああてはまる」を「まあ気軽に子育て相談ができていた」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「気軽に子育て相談ができていなかった」とした。
- ※2 保護者の小学校入学前の子どもへのかかわりを「人との関係性・マナーなど」「遊び」「文字・数・言葉」「主体性・粘り強さ・思考力」「生活習慣」という5つに分類（質問項目の詳細はP17参照）。分類ごとに得点を算出し、保護者のかかわりの高い順から「高群」「中群」「低群」に3分割した。横棒の数値は「高群」の%を表している。

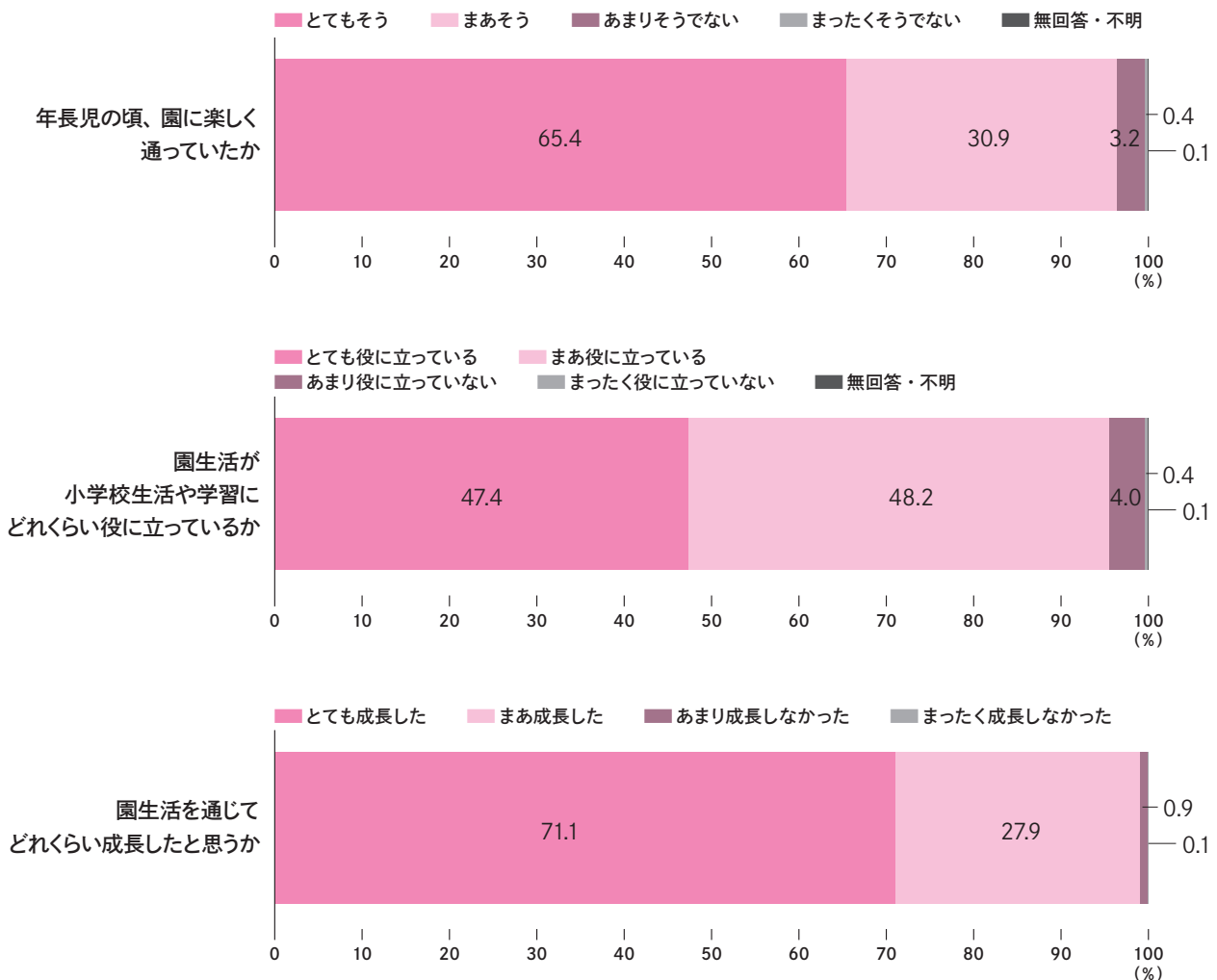
4も2(P18参照)のグラフに関連して、保育者のかかわりが、保護者にどのような影響を与えるかを見たグラフです。保護者の入学前の子どもに対する5つのかかわり(P17表参照)ごとに、保育者による子育て支援との関連を示しています。

子育て支援が充実しており、「とても気軽に子育て相談ができていた」と感じる保護者は、子どもへの5つのかかわりすべてについて、「よくしていた」にあたる「高群」の割合が高い結果となっています。ここでも子育て支援

の程度の差に着目すると、「とても気軽に子育て相談ができていた」と「気軽に子育て相談ができていなかった」の差がもっとも大きいのは、「主体性・粘り強さ・思考力」に関するかかわりで、約15ポイントでした。

保育者による子育て支援は、保護者を通じて、その先にいる子どもへもよい影響を与えることがわかりました。園が行う子育て支援には、大きな意味や役割があるので

楽しさ、役立ち度、子どもの成長への実感のすべてで 保護者は園生活への満足度が高い



5の3つのグラフは、園に対する保護者の総合的な評価と捉えることができます。

いずれも「とても」と「まあ」を合計すると95%を超え、特に「園生活を通じてどれくらい成長したと思うか」は100%に近い数値です。小学1年生の保護者が子ども

の入学前を振り返ると、年長児の頃は大半の子どもが楽しく園に通い、園生活が小学校での生活や学習に役立っていると感じ、それらを通して子どもが成長したことを保護者が実感しているということがわかります。

まとめ

1～5でご紹介したグラフが示す結果から、改めて園の果たす役割の重要性がわかりました。保育者の働きかけは、子どもへの直接的な形はもちろんのこと、保護者を介した間接的な形としても子どもの成長を支えています。そして、そうした子どもの姿を通して、保護者は楽しさ、役立ち度、子どもの成長への実感のすべての面で、

園に対する高い満足感を得ています。

現在行っている子どもや保護者へのさまざまな働きかけが、小学校以降の子どもの成長に確かにつながっていく——。各園の先生方においては、このことをよりいっそう意識して保育を行っていくことが大切ではないでしょうか。